

# イエス・キリストの啓示 - 第十二

## 二つのテスト

Jeff Pippenger

2023-11-07

私たちは現在、第一の天の戦場で起こる大争闘の最後の猶予期間の戦いに登場するすべての対立勢力が示されている、黙示録第11章から第13章を検討しています。対立勢力は、一方に、第二的戦力としてバビロンから出てくる大群衆を伴う十四万四千人があり、他方に、国際連合、カトリック教会、アメリカ合衆国、そしてサタンそのものがあります。十四万四千人と大群衆は第三天使のメッセージを代表する神の軍勢であり、さらに、この戦いの双方は、第三天使ではなく第三のわざわいによって表される神の裁きの軍勢とも対峙します。

2020年に共和主義とプロテスタント主義という角が殺害されるに至った要素を見極めるために、私たちは、日曜法からミカエルが立ち上がる時までのあいだ、第一の天における人類の戦いの中で現れる預言的な特徴を特定しようとしている。その歴史において、全世界は獣の像を造ることを強いられる。その歴史は、2001年9月11日から間もなく到来する日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の歴史の繰り返しであり、その日曜法がこれら二つの並行する歴史を分ける。並行する歴史として、それぞれが他方への証しとなっている。一方の歴史で起こることは、もう一方の歴史でも起こる。黙示録第12章と第13章が焦点を当てているのは第二の歴史であり、今やほとんど終わりに近づいている第一の歴史に預言的な光を投げかけるために、私たちは第二の証しを理解しようとしている。

世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力は、第十二章と第十三章に示されている。最初に言及されるのは竜の勢力である。

また、天にもう一つのしるしが現れた。見よ、大きな赤い竜がいて、七つの頭と十本の角を持ち、その頭には七つの冠があった。その尾は天の星の三分の一を引き寄せて地に投げ落とした。そして、その竜は出産しようとしている女の前に立ち、子が生まれるやいなやそれを食い尽くそうとしていた。ヨハネの黙示録 12章3、4節。

ホワイト姉妹は、この章の竜はサタンであるが、第二の意味では異教ローマを指すと私たちに教えています。サタンも異教ローマも、いずれも国際連合を象徴しています。獣の十本の角は、黙示録17章に出てくる十人の王の邪悪な連合を表しています。その十人の王は黙示録17章で示され、そこで彼らは聖書予言における第七の王国として位置づけられています。獣は七つの冠をかぶった七つの頭を持つものとして描かれており、それによって聖書予言の第七の王国であることが示されています。ダニエル書2章では彼らは霊的なギリシャとして表され、カルメル山の証しにおいてはアハブであり、さらに詩篇83篇の十の敵でもあります。

黙示録12章と13章で言及されている敵の第二の地上の権力は、海から上がってくる獣であり、ホワイト姉妹はそれを直接カトリック教であると特定している。

私は海の砂の上に立ち、海から一匹の獣が上って来るのを見た。その獣には七つの頭と十本の角があり、その角には十の冠があり、その頭には冒瀆の名が記されていた。私が見たその獣は豹のようで、その足は熊の足のようで、口は獅子の口のようであった。竜はその獣に自分の力と座と大いなる権威を与えた。また、その頭のうちの一つが死に至るほどの傷を負ったかのように見えたが、その致命的な傷は癒された。こうして全地の人々はその獣に驚き従った。ヨハネの黙示録 13:1-3。

第一節でヨハネは海辺に立っており、海から一匹の獣が上って来るのを見る。その後、地から上って来る一匹の獣を見る。ホワイト姉妹は、ヨハネがこの二匹の獣を見た時が1798年であると特定している。というのも、その年、教皇権が「力を奪われ」、やがて癒やされることになる致命的な傷を負ったからである。

「教皇権が力を奪われ、迫害をやめざるを得なくなった時、ヨハネは、竜の声に呼応して同じ残酷で冒瀆的な働きを推し進める新しい勢力が台頭するのを見た。この勢力は、教会と神の律法に戦いを挑む最後の勢力であり、子羊のような角を持つ獣として表されている。それに先立つ獣は海から上って来たが、これは地から上って来た。それは、それが象徴する国家、すなわちアメリカ合衆国の平和的な台頭を表している。」 Signs of the Times, 1910年2月8日。

ヨハネは海の獣、すなわち教皇権を見ると、歴史を遡って見ている。歴史の前方を見渡すと、彼は地の獣、すなわちアメリカ合衆国を見る。これが、海から上がる獣が預言においてそのように描かれている理由である。1798年から振り返ると、ヨハネはまず「七つの頭と十本の角」を見るが、これは、教皇権の強大な角が大いなることを語ったそのための場所を空けるべく、十本のうち三本の角が引き抜かれたという歴史上の時点を指し示している。

それから私は、第四の獣の真実を知ろうとした。それは他のすべてと異なり、きわめて恐ろしく、歯は鉄、爪は青銅で、食い尽くし、打ち砕き、残りを足で踏みつけた。また、その頭にあった十本の角と、新たに生え出てその前に三本が倒れた別の一本の角、すなわち目があり、非常に大きなことを語る口を持ち、その姿が仲間よりもいっそう強そうに見えたその角についても知ろうとした。ダニエル書 7:19、20。

ヘルリ族、東ゴート族、ヴァンダル族の三本の角が取り除かれる前、異教ローマは「十の冠」で表されていた。その十の冠は異教ローマを表している。次にヨハネは、ギリシアの豹、次いでメディア・ペルシアの熊、そしてバビロンの獅子を挙げる。

最初のものは獅子のようで、鷲の翼を持っていた。私が見つめていると、その翼はむしり取られ、地から持ち上げられて、人のように足で立つようにされ、そのうえ人の心が与えられた。すると見よ、第二の別の獣が、熊に似ており、一方の側を持ち上げていて、その口には歯の間に三本の肋骨があった。人々はそれに向かってこう言った。「立て、多くの肉をむさぼり食え。」その後、なお見ていると、見よ、もう一つの獣がいて、豹に似ており、その背には鳥の翼が四つあり、その獣にはまた四つの頭があった。そしてそれに支配権が与えられた。ダニエル書 7:4-6。

カトリックにはキリスト教の要素が一つもなく、海の獣は聖書の預言に登場するそれ以前のすべての異教の諸王国の結合体を表している。ヨハネは歴史を振り返っているので、

海の獣は歴史を逆にたどる順序で示されている。彼はまず、三本の角が取り除かれたときに確立された権力-教皇権-を見た。次に、十の冠を持つ十の角-異教ローマ-を見た。次に、豹-ギリシャ-を見た。次に、熊-メド・ペルシア-を見た。次に、獅子-バビロン-を見た。海の獣の記述は、それ以前の異教の諸王国それぞれの要素から成り、この記述は、教皇権が聖書の歴史に存在したあらゆる形態の異教の混合体であることを立証している。カトリックにはキリスト教の要素が一つもない。カトリックにおいてキリスト教的に見えるものは何であれ偽物である。

カルメル山で、エリヤがイゼベルの預言者たちと彼女の背教した夫と戦っていたとき、イゼベルはサマリアの自宅にいた。二本の角を持つ地の獣の歴史の間、ツロの淫婦は忘れ去られている。イゼベルはいつも身を潜めており、黙示録第十二章と第十三章では世界は彼女に驚嘆するが、彼女は国際連合、アメリカ合衆国、そしてサタンのように、天において驚異として仰ぎ見られるものとしては描かれていない。彼女はサマリア-ローマの都-にある司令中枢に戻っている。

地の獣の歴史の中で、全世界に課される獣の像の試練が明らかにされる。その試練は、第一の天における戦いのさなかに行われる。この点をここで考察したい。これから考察する箇所では、「彼」という語を「アメリカ合衆国」に置き換える。

そして私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。アメリカ合衆国は小羊のような二本の角を持ち、竜のように語った。アメリカ合衆国は、第一の獣の前で第一の獣のすべての権威を行使し、致命の傷が癒やされたその第一の獣を、地とそこに住む者たちに拝ませた。アメリカ合衆国は大いなるしるしを行い、人々の目の前で天から地上へ火を降らせた。また、アメリカ合衆国が獣の前で行う権能を持っていたその奇跡によって、地に住む者たちを惑わし、地に住む者たちに、剣で傷を受けてなお生きたその獣の像を造るようと言った。[アメリカ合衆国]はその獣の像に息を与える力を持ち、その獣の像を語らせ、またその獣の像を拝まない者は皆殺されるようにさせた。アメリカ合衆国は、小さい者にも大きい者にも、富める者にも貧しい者にも、自由人にも奴隷にも、右の手か額に刻印を受けさせ、そして、刻印、あるいは獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、誰も買うことも売ることもできないようにさせた。ヨハネの黙示録 13:11-17。

ヨハネの黙示録第13章では、異教ローマの竜が、教皇権を地上の王座に据えるにあたり、教皇権に三つのものを与えた。

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2。

異教ローマを代表する十人の王たちは（アハブにより象徴されるように、フランスはその十人のうち筆頭の王である）、教皇権に三つのもの、すなわち権力、座、そして権威を与えた。330年に皇帝コンスタンティヌスが西方のローマ市から東方へと首都を移し、コンスタンティノープルをローマ帝国の新たな首都としたとき、異教ローマはローマ教会にその「座」を与えた。

フランク人（フランス）の王クロヴィスが496年にカトリックに改宗し、教皇権の地上の王座への台頭に抵抗し続けていた諸勢力と戦い始めたとき、異教のローマは教皇権にそ

の「権力」を与えた。

533年、ユスティニアヌスは、ローマ教会をすべての教会の首位とし、同時に異端者を正す者と定める勅令を発した。その時点で、異教時代のローマの権威は教皇権に付与された。

12節には、「[アメリカ合衆国]はその前で第一の獣のすべての権力を行使する」とある。教皇権によって行使されたその権力は、軍事力と経済力をローマ教皇庁に捧げたクローヴィスによって象徴されている。だからこそ、カトリック教会はクローヴィスを「カトリック教会の長子」、フランスを「カトリック教会の長女」と呼ぶ。アメリカ合衆国も、クローヴィスが496年に始めたのと同じ汚れ仕事を、教皇庁のために行うことになるだろう。

アメリカ合衆国の力は、「地とそこに住む者たちが、致命的な傷が癒やされた第一の獣を礼拝する」ようにするために用いられる。アメリカ合衆国はその軍事力と経済力を用いて、全世界に日曜日を休息の日として受け入れさせる。ツロの淫婦は、間もなくやってくる日曜法の際にまず地の獣と姦淫を犯し、その後、地の他のすべての王たちとも姦淫を犯しに出て行く。

第十三節では、「[アメリカ合衆国]は大いなるしるしを行い、人々の見ている前で、天から地上に火を降らせる」とある。火は神聖でないメッセージを表す。ペンテコステの日の火の舌は、そのメッセージを全世界に伝える能力を伴った聖なるメッセージを表していた。アメリカ合衆国によって天から降ろされるその火も、すべての国とすべての言語に影響を及ぼすだろう。

第十四節では、アメリカ合衆国は「[アメリカ合衆国]が獣の前で行う権能を持っていたその奇跡によって地に住む者たちを欺き、地に住む者たちに向かって、剣で傷を負い、なお生きたその獣の像を造るべきだと言う」。アメリカ合衆国が世界を欺くために用いるこの欺きは、前の節で天から降ってきた火によって表されている。天からの火は奇跡を生み出し、アメリカ合衆国はそれらを用いて、教会と国家の結合から成り、その関係を教会が支配する世界統一政府を樹立するよう世界に命じる。

これは、エリヤが起こされたとき、アハブとイゼベルの関係が象徴していたものである。カルメル山におけるエリヤの戦いは、プロテスタントの真の預言者をプロテスタントのすべての偽りの預言者から区別するために、1840年から1844年にかけての第一の天使の運動の間、アメリカ合衆国の初期において成就した。

それは、アメリカ合衆国の終わりの時に、2001年9月11日に始まり、間もなく来る日曜法で終わる獣の像の形成をめぐる試練の期間中に、再び成就する。

エリヤの完全な成就是、主の大いなる恐るべき日、すなわち最後の七つの災いに先立って起こる。したがって、カルメル山、エリヤ、アハブ、イゼベルは、カトリック教会に支配される国連の世界統一政府を全世界に受け入れさせるよう米国が強制する働きの中で象徴されている。米国は、軍事力、経済力、そしてそれが指揮し統制する墮落した催眠的な情報伝達、すなわちいわゆるワールドワイドウェブの「情報スーパーハイウェイ」に象徴されるものを通じて、この行為を成し遂げる。

第十五節では、「[アメリカ合衆国]は獣の像に命を与える力を持ち、獣の像が語り、また獣の像を拝まない者は皆殺されるようにさせることができた」と知らされている。こうして、当時国連の筆頭の王を代表していたアメリカ合衆国の軍事力による死の脅威が、国連の世界統一政府に語る力を与える。語るという行為は、立法権と司法権を通じて実現される。国連の立法部門はニューヨークにあり、司法部門はオランダのハーグにある。ハーグは旧世界を、ニューヨークは新世界を象徴する。アメリカ合衆国もオランダも、自由の擁護者として際立っていた過去の歴史を持つが、いずれも結局は竜のように語ってその歴史を終える。

全キリスト教界にわたって安息日が特別な争点となり、日曜遵守を強制するために宗教的権力と世俗的権力が結託するにつれて、大衆の要求に屈することを頑として拒む少数者は、万人の憎悪の的となるであろう。…そしてついには、第四戒の安息日を聖とする者たちに対して布告が出され、彼らは最も厳しい処罰に値すると断罪され、一定の期間の後に彼らを殺すことを民衆に許すのである。旧世界のローマ教と新世界の背教的プロテスタンティズムは、神のすべての戒めを尊ぶ者たちに対して、同様の道をたどるであろう。

そのとき、神の民は、預言者が「ヤコブの苦難の時」と描写した患難と苦悩の光景のただ中に投げ込まれるであろう。『The Great Controversy』 615、616。

第16節と第17節では、獣の像が立てられ、語る力を与えられた後、「[アメリカ合衆国]は、小さな者も大きな者も、富む者も貧しい者も、自由な者も奴隷もすべて、右手か額に刻印を受けるようにさせる。また、その刻印、あるいは獣の名、またはその名の数を持つ者以外は、誰も買うことも売ることもできないようにする。」とある。

獣の像の形成は、獣の刻印の試練に先立つ試練である。私たちが獣の像の形成をめぐる試練を乗り越えられなければ、獣の刻印の試練には失敗することになる。これらは二つの異なる試練であり、種類も異なる。

2001年9月11日に始まった獣の像の形成は、恩恵期間の終結が間近に迫っているという預言的な警告である。これは、カルメル山が近づいており、最後の呼びかけがなされる前に、神の民が品性の油、聖霊の油、そして真夜中の叫びのメッセージの油を備える必要があることを示すエリヤのメッセージである。彼らは目を覚ましていなければならない。そうすれば、エリヤが「いつまで二つの意見の間でよろめくのか」と問いかけるとき、沈黙することはないだろう。というのも、その時に口をつぐむことは獣の刻印を受けることだからである。獣の像の試験は、ミラー派のメッセージが審判の開始を告げたのと同様に、審判の終結を告げるメッセージを理解するという働きを表している。

獣の刻印の試験は、恩恵期間の要素を含まないため、選択の余地はない。それは期間ではなく、一つの時点である。それは危機であり、したがって、日曜法においてアハブによってカルメル山に召集されるイスラエル人たちの品性を識別する試金石となる。彼らはそのとき、以前の期間に培ってきた品性を示すことになるが、その期間は予言的に「獣の像の試験」と呼ばれる。

それゆえ（聖霊が言われるとおりに、「きょう、もしあなたがたが御声を聞くなれば、心をかたくなにすることはならない。荒野での試みの日に、反抗したときのように。あなたが

たの先祖がわたしを試み、ためし、四十年の間わたしのわざを見た。だから、わたしはその世代に憤り、こう言った。『彼らはいつも心が迷い、わたしの道を知らない。』それで、わたしは怒りにおいて誓った。『彼らを決してわたしの安息に入らせない。』」) 兄弟たちよ、生ける神から離れ去る不信仰という悪い心が、あなたがたのだれのうちにも起こらないよう、よく気をつけなさい。むしろ、「きょう」と呼ばれている間は、日々互いに励まし合いなさい。罪の欺きによって、あなたがたのうちのだれも心がかたくなにされることのないためです。なぜなら、初めの確信を終わりまで堅く持ち続けるなら、私たちはキリストにあずかる者であるからです。「きょう、もしあなたがたが御声を聞くなら、反抗したときのように、心をかたくなにはならない」と言われているとおりです。ヘブライ人への手紙 3:7-15。